屋内落石実験の実測値を用いた落石シミュレーションに関する検討

土木研究所	寒地土木研究所	正会員	○表	真也
国土交通省	北海道開発局	正会員	岡田	慎哉
土木研究所	寒地土木研究所	正会員	石川	博之
土木研究所	寒地土木研究所	正会員	日下普	祁祐基
土木研究所	寒地土木研究所	正会員	伊東	佳彦

1. 目的

ここでは、個別要素法を用いた落石シミュレーションにおける解析定数の設定法について屋内実験を行い検討したので報告する.

# 2. 屋内実験(自由落下試験)

**写真-1**には,屋内実験状況を示す.本実験は落下 試験体の落下高さを任意に変えて平盤試験体に衝突 させ,跳ね返り係数を求める自由落下試験である.

#### a)屋内実験試験体の形状・寸法

落下試験体および平盤試験体は,後述の落石挙動解 析を行う研究対象斜面と地質条件・地質構成が類似し ている斜面から岩を採取し作製した.落下試験体は岩 体と岩球体の2種類とし,岩球体については3種類を 作製した.その直径および質量はそれぞれ φ10cm 1.3kg, φ20cm 10.8kg, φ30cm 35.5kg である.また, 平盤試験体は岩盤(一軸圧縮強さ63 N/mm<sup>2</sup>)と写真 -1のモルタル盤(一軸圧縮強さ35 N/mm<sup>2</sup>)の2種類 とした.

#### b) 落下試験と計測方法

落下試験は,落下高さをパラメータとし任意に変化 させ,衝突前後の速度を計測し跳ね返り係数を求めた. なお,岩球体の跳ね返り係数は落下高さ,落下速度が 精度よく算定できる2回目,3回目の跳躍時について



写真-1 屋内実験状況(自由落下試験)

キーワード 個別要素法,落石シミュレーション,DEM,落石 連絡先 〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1番34号 寒地土木研究所 TEL011-841-1698

表-1 屋内実験結果

<u> </u>		落 体			茨下	と下計… 跳わ返り係数			
	平盤	形状	m r 重量	十 法	高さ	測躍	計測値		
	材貨	10 0	(kg)	(cm)	(m)	可数	e	平均	採用値
	岩盤	岩球体	1.3	φ10	0.5	3	0.68		
	岩盤	岩球体	1.3	φ10	1.0	3	0.64	0.66	
	岩盤	岩球体	1.3	φ10	2.0	2	0.60	0.00	
	岩盤	岩球体	1.3	φ10	3.0	2	0.70		
	岩盤	岩球体	10.8	φ 20	0.5	3	0.70		
	岩盤	岩球体	10.8	φ20	0.5	3	0.73		0.60
石式	岩盤	岩球体	10.8	$\phi 20$	1.0	2	0.48	0.61	
城休	岩盤	岩球体	10.8	φ20	2.0	3	0.53		
っ の	岩盤	岩球体	10.8	φ20	3.0	1	0.61		
室	岩盤	岩球体	35.5	φ 30	0.5	3	0.60	0.47	
内	岩盤	岩球体	35.5	φ30	1.0	2	0.34	0.47	
実	モルタル盤	岩球体	1.3	$\phi 10$	0.5	3	0.51		
颗	モルタル盤	岩球体	1.3	φ10	1.0	3	0.61	0.53	
木件	モルタル盤	岩球体	1.3	φ10	2.0	2	0.49	0.55	0.46
	モルタル盤	岩球体	1.3	$\phi 10$	3.0	3	0.49		
	モルタル盤	岩球体	10.8	φ20	0.5	2	0.48		
	モルタル盤	岩球体	10.8	φ20	1.0	2	0.44	0.52	
	モルタル盤	岩球体	10.8	φ20	2.0	3	0.63		
	モルタル盤	岩球体	35.5	φ 30	0.5	1	0.25	0.26	
	モルタル盤	岩球体	35.5	φ30	1.0	1	0.27	0.20	
	岩盤	岩体	1.9	□12×10×13	1.0	1	0.24		
	岩盤	岩体	1.6	□9×8×19	1.0	1	0.34		
	岩盤	岩体	4.7	□13×12×20	1.0	1	0.44		0.24
	岩盤	岩体	4.6	□13×8×30	1.0	1	0.33	0.34	
	岩盤	岩体	10.5	□20×20×22	1.0	1	0.31		
	岩盤	岩体	3.6	□9×14×16	1.0	1	0.31		
岩休	岩盤	岩体	6.5	□16×18×23	1.0	1	0.43		
の	モルタル盤	岩体	1.6	□9×8×19	1.0	1	0.30		
室	モルタル盤	岩体	1.9	□12×10×13	1.0	1	0.27		
内	モルタル盤	岩体	3.6	□9×14×16	1.0	1	0.31		
夫 殿	モルタル盤	岩体	4.7	□13×12×20	1.0	1	0.24		
<i>歌</i> 条	モルタル盤	岩体	2.3	□16×7×17	1.0	1	0.16		
件	モルタル盤	岩体	5.8	□17×15×23	1.0	1	0.30	0.20	0.15
	モルタル盤	岩体	6.0	□14×21×22	1.0	1	0.29	0.29	0.15
	モルタル盤	岩体	3.0	□13×13×22	1.0	1	0.38		
	モルタル盤	岩体	2.7	□13×10×14	1.0	1	0.34		
	モルタル盤	岩体	3.8	□16×13×20	1.0	1	0.15		
	モルタル盤	岩体	1.5	□10×8×16	1.0	1	0.38		
	モルタル盤	岩体	2.8	□15×10×19	1.0	1	0.35		

検討することとした.

#### c)屋内実験のまとめ

表-1 には、落下実験により得られた屋内実験結果 を示す. 岩体は、岩球体と比較して低い跳ね返り係数 になる傾向がみられる. 岩体の跳ね返り係数が岩球体 に比べ低い値となったのは、岩体が平盤試験体と衝突 した時にその形状により反発エネルギーの一部が回転 力に変換されたことや,衝突時に局所的な破砕や欠損, 変形やめり込みによりエネルギーが消失したためと推 察される.

これらの屋内実験の結果から、実験を行った範囲内 では落下実験体の材質及び被接触面の材質が同じであ っても、落体の形状によって跳ね返り係数が異なる結 果が得られた.

# 3. 当該斜面の D E M 落石シミュレーション

# (1) 斜面および落石のモデル化

屋内実験結果を用いて、研究対象斜面での落石シミ ユレーションを行った.対象斜面は、高さ200mを越 える急崖斜面で、3mの落石防護工およびその背面に5 ~20mの落石防護溝を有する.落石岩体は現地調査か ら直方体形状とし、シミュレーションでは落石の経路、 落石防護工に対する落石岩体の衝突の有無、および衝 突した場合の落石エネルギーを求めること目的として 行った.

## (2) 3 次元 D E M の解析ケース

表-2 に本解析にて実施した解析ケースの一覧を示 す.跳ね返り係数は屋内実験結果(表-1)に示した 採用値を用いた.落石岩体は直方体として斜面との衝 突時に受ける抵抗を再現するため、転がり摩擦係数<sup>1)</sup> 1.0 を設定した.また、要素の直径を 1.0m、重量を 104kN とし、バネ係数は岩片の超音波伝播速度から導 き、法線方向 8.0×10<sup>10</sup> N/m、接線方向 2.0×10<sup>9</sup> N/m とした.なお、粘性減衰係数は反発係数から導いた<sup>2)</sup>.

(3) 3 次元 D E M による落石到達範囲

図-1には、3次元DEM落石シミュレーションにより 得られた岩球体の跳ね返り係数を用いた落下軌跡の過 程を示す.

図-2 には、図-1 の岩球体の跳ね返り係数を用いた場合の落石停止位置を示す.落石岩体の一部は落石防護工を通過するものが生じた.

## (4) 3 次元 D E M の落石エネルギーの算定

表-3 に落石防護工の位置を落石岩体が通過した時 点での鉛直速度,落石エネルギーを示す.図-2 に示 すように落石防護工の位置を通過した落石岩体は2岩 体である.なお,それぞれの落石岩体の鉛直速度は15.8 m/s,12.2 m/s,落石最大エネルギーは1,300 kJ,774 kJ であった.

表-2	解析ケ-	-ス一覧	
		× 1 1 1 1	KL /

茨丁巴休	落体	斜面	跳ね返 り係数	落体直径	落体重量	バネ係数	転がり	
冷口石冲						法線方向	接線方向	摩擦係数
	安	安山岩	0.60					
岩球体	山	火砕岩	0.46	1.0m	104kN	8.0×10 <sup>10</sup>	$2.0 \times 10^{9}$	1.0
	岩	崖錐部	0.01					
	安	安山岩	0.24					
岩 体	山	火砕岩	0.15	1.0m	104 kN	$8.0 \times 10^{10}$	$2.0 \times 10^{9}$	1.0
	岩	崖錐部	0.01					



図-1 岩球体の跳ね返り係数を用いた場合の落下軌跡の過程



図-2 岩球体の跳ね返り係数を用いた場合の落石停止位置

表-3 落石防護エへの落石エネルギー(岩球体)

落石岩体	斜面	跳ね返り係数	落体直径	落体重量	落下高さ	鉛直速度	落石エネルギー
岩球体	安山岩	0.60		104kN	176m	15.8 m/s	1300kJ
	火砕岩	0.46	1.0m				
	崖錐部	0.01					
岩球体	安山岩	0.24	1.0m	104kN	175m	12.2 m/s	774kJ
	火砕岩	0.15					
	崖錐部	0.01					

### 4. まとめ

結果をまとめると以下のようになる.

- (1) 落下試験体の材質及び被接触面の材質が同じであっても,落下試験体の形状で跳ね返り係数が大きく異なる.
- (2) 3 次元 DEM では,落石の挙動や落石エネルギー および到達範囲が推定できることから,道路防災 に有効な手法であると考えられる.

### 参考文献

- 阪口秀,岩下和義,中瀬仁,本田中,西野隆之:土 の構造とメカニックス-ミクロからマクロへ 4,数 値粒子法による土の微視的挙動の追跡(その 4), 社団法人地盤工学会, pp. 53-58, 2002
- 2) 大町達夫, 荒井靖博: 個別要素法で用いる要素定数 の決め方について, 構造工学論文集Vol. 32A, 1986